

（前ページからの続き）

もつともつと言えども、家の中を明るくさせることが、あなたの役目なんです」

「私、明るく、元気でやっていきます」

「それからね、今日からあなたと私は、親子になる。だけどさ、昔からいう嫁姑よね。だけでもさ、『思えば、思われる』でやっていきますよ。私もあなたのこと、一生懸命思っているから、あなたも私のこと、思ってくださいよ」

ほんとうに、お姑さんは私のことを思ってくれたんです。私も一生懸命にお姑さんのこと、思いましました。でも、お姑さんの思いのほ

うが、強かったんですねえ。そんなに思ってくれなくてもいいのに、なあとと思うくらい、思ってくれました。毎日毎日、思いつばなしだっただけです。はしの上げ下ろしまで思ってくれました。

お姑さんて、少し意地悪だな、暮らしていけるかな…

四畳半二間の家でした。もう、畳も何もかも、ボロボロだったんです。あるとき「かよ子さん」て呼ばれて「はい」って言ってズカズカズカッとしていったら「あなた、何ですか、はしたないじゃありませんか。畳のへりなんか踏んで…」

へりなんかなくて、隅のほうにワカメみたいなのが、へばりついているだけなんです。それと、水道の鉛管が焼け跡に出でましてね、洗たく板とたらいを持って、ごしごしやってた時代だったんです。で、ごしごしやりながら、お天気が良かったりするよ、ついで鼻歌を歌っちゃうんですよ。リンゴの唄とかいろいろ。すると、家の中からお姑さんが、「かよ子さん、あなた鼻歌もくせになっちゃってるのね。治るまで私が毎日注意してあげるからね」って親切に言ってくれるんですよ。



もう毎日毎日、ご飯のよそり方、お茶のつぎ方、ぬかみそおけのベタベタ…ほんとうに、息つく暇もないほど思ってくれたんです。それからどうなるかと思っちゃいました。

お姑さん、ありがとうございます！

あるとき、こんなこともありました。台所でご飯を炊いてたんです。姑のお友達が来てまして「かよ子さん」て呼ばれたんです。あ、お友達が来てる、良く思われようと思いきや、私、精いっぱい明るい大きな声で「ハイ！」と返事して「何でしょうか」って、そばへ行ったんです。そうしたらとたんに「あなた、びっくりするじゃない。こんな狭い家で大きな声で返事して。返事の一つも使い分けようじゃないとだめよ」と言われたんです。ああ、明るいばかりがいいんじゃない。これから先、お姑さんどうやって暮らしていくたらいいんだろう。お姑さんて、お根性悪くないのかな。少し意地悪だな。お姑さんと、これからやっていけるのかな。そんな思いになっちゃったんです。

そんなあるときなんです。私に小学校の同窓会の通知が来たんです。同窓会といっても、ほとんどのお友達が亡くなりました。で、生き残った友達だけで懐かしい場所を歩こうじゃないか、という通所を歩いたんです。これを何気なく「お姑さん、こういうのが来たんです」って見せたんです。そうしたら「あら、良かったわねえ。あなたにも友達がいたの。お行きなさい」って言ってくれたんです。でも、私、そのとき着て行く物がなかったんです。

ほんとうに何もなかったわね。ちよつと待ちなさいよ」そう言ってから、押し入れに首を突っ込んで、ゴソゴソやってたんです。そのうち「これを着て行けばいいわよ」と引っぱり出してくれたのが、まあ、茶色と黒のだんだら縞の、衿のよれよれの着物を着たんです。これだったら、今着てる着物のほうが、よっぽどいいのにな、と思っちゃったんです。お姑さんは、それをひなたぼっこしながら、あつという間にほろほろと泣いてました。それを持って、「行ってください」と出かけて行っちゃいました。で、あくる日の夕方なんです。「ただいま」ってニコニコしながら帰ってきたお姑が、風呂敷包みを持って来たんです。「あなたにさあ」って、くれたんです。「なあに？」ってもらいまして、風呂敷を開けてみたら、中か

私はもう人生の先輩なんだ。少々のことろを注意してもいい、小言を言ってもいい、だけど、思わぬとき大きな親切をドカーンとするのがいいんじゃないのかな。

黒地に朱の桜模様が点々とついた反物が…

「お姑さん、これ、どうしたのよ。昨日のあれが、これに染まったのよ。一夜染めの、至急染めだから色が二色しか使えなかつたけどね、あなたに染めてあげたのよ」

そのときばかりは「お姑さん、どうもありがとう、私、こんなモダンな柄、一度も着たことないわ。どうもありがとう」って…。これをもらったときは「お姑さんは、お根性悪くない」と思いました。

でも、反物じゃ着て行かれないと思ってる。「まだ一週間も間があるんだから、教えてあげるから縫いなさい」と言われるままに茶だんすの上に乗せておいたんです。で、何の気なしに二日ばかり日がたってしまいました。縫いたい縫いたいと思いががらだつたんです。でも、まだ五日あるから、

だいたいぶかかな、と思いががら二日目の夜のことでした。ひよいと夜中に目を覚ますと、隣の部屋に電気がついているんですよ。あれ、お姑さん、まだ起きてるのか、と思つて、何気なく、「お姑さん」ってふすまを開けてびっくりしたんです。裸電球がずうつとひもで引張られてお姑さんの手もとにボヤッと下がってます。お姑さんは背中を丸くして、私の黒地に朱の模様のその着物を、こうやって縫っててくれたんです。

それを見たとき、どうしようかと思っちゃったんです。

「お姑さん、こんなことしてくれなくて…。困るわ、私」

「いいの、いいの、私は好きでやってるんだから。あなたは明日があるんだから寝なさい、寝なさい。また、時間があるときに、ゆっくりに教えてあげるから。いいの、寝ていいの」

「申し訳ありません…」あとはもう言葉になりません。そのときばかりは、このお姑さんのことを、お根性悪だ、なんて思っちゃったことが、何とも心痛みまされた。あんまり「寝なさい」って言われたもので「そうですか、悪いわ」って言いながら、お布団へ戻りました。あんなにうれしくて、ありがたくて、枕ぬらしたことに、

ありませんでした。それからというもの、少々姑に小言を言われようが、注意されようが、「お姑さんのまあるい背中、夜中に私が寝てたのに、背中を丸くして縫っててくれた」と、あの姿を思い出すと、全部消すことができました。

姑のような姑でありたい

私は今、長男の嫁といつしよに生活して、もう四年もたつんですけれど「私はもう人生の先輩なんです、少々のことろを注意してもいい、小言を言ってもいい、だけど思わぬときに、大きな親切をドカーンとするのが、いいんじゃないのかな」と思いながら、暮らしています。

姑といつしよに暮らした三十年は、夫より七か月余計で、姑は私の人生の中で最も長く一つ屋根の下で共に生活した人でした。

思い返して、姑のような姑でありたい、辛抱強くて涙もろい、少々頑固でしゃべりがあって、そして、海のような広い心、そして、ハハ、のんきだね、でいいなと思っています。

（九月九日、サルナート吉運）堂での講演の一部を掲載

